

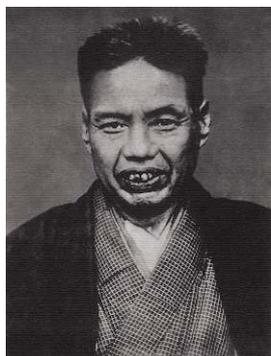
かわなべ
河鍋

きょうさい
暁斎

日本画家

1831(天保2)年～1889(明治22)年

1. 経歴・狭山市との関わり



1831(天保2)年、下総国古河(現・茨城県古河市)に記右衛門ととよ(豊)の次男として誕生。幼名を周三郎、本名は陳之。幼少時から画を好む。1837(同8)年、歌川国芳に弟子入りし浮世絵を学ぶ。1840(同11)年、狩野派前村洞和に師事するが、師が病気になると狩野洞白に入門。1849(嘉永2)年、19歳で「洞郁陳之」と号する。1853(同6)年、師匠が世を去ると狩野派と縁を切り、1858(安政5)年「惺々狂斎」と改める。1870(明治3)年、俳諧師・其角堂雨雀主催の書画会で風刺画の筆禍事件を起こし、投獄される。その後「暁斎」を名乗る。岡倉天心と親交を持ち、弟子にイギリスの建築家コンドルがいる。1889(同22)年、東京府東京市下谷根岸本町(現・台東区根岸)で逝去する。享年59。

1879(同12)年、林宝泉(宝仙)が本寺の靈雲寺(文京区湯島)から末寺の高麗郡柏原村(現・狭山市柏原)の西浄寺に派遣される。すると、宝泉から仏教の教えを受けた暁斎は西浄寺を訪れ、そこを拠点にして、川越町(現・川越市)や所沢町(現・所沢市)、飯能町(現・飯能市)まで足を運んだ。大黒天信仰の甲子講で知られた西浄寺には、たくさんの鼠が大きな張り子の打ち出の小槌を塗り替える様子を描いた《ねずみの図》(狭山市指定文化財)と、スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治する様子を描写した《神楽図》が所蔵されている。

1879(同12)年、林宝泉(宝仙)が本寺の靈雲寺(文京区湯島)から末寺の高麗郡柏原村(現・狭山市柏原)の西浄寺に派遣される。すると、宝泉から仏教の教えを受けた暁斎は西浄寺を訪れ、そこを拠点にして、川越町(現・川越市)や所沢町(現・所沢市)、飯能町(現・飯能市)まで足を運んだ。大黒天信仰の甲子講で知られた西浄寺には、たくさんの鼠が大きな張り子の打ち出の小槌を塗り替える様子を描いた《ねずみの図》(狭山市指定文化財)と、スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治する様子を描写した《神楽図》が所蔵されている。

2. 主な業績

1881(明治14)年、51歳の時、東京上野公園で行われた第2回内国勸業博覧会において、《枯木寒鴉図》が日本画の最高賞である妙技二等賞牌を受賞し、後に高価で売買される。

- ・美人画：《美人観蛙》《地獄太夫と一休》《達磨の耳かき》
- ・風俗と故事人物画：《四季耕作》《牽牛織女》《天孫降臨》
- ・仏界と冥界画：《閻魔大王玻璃》《地獄極楽》《鍾馗と鬼》
- ・戯画：《動物群舞》《鳥獣戯画 猫又と狸》《蛙の放下師》
- ・浮世絵：《江戸名所 築地波除乃夜景》《風流蛙大合戦》



《ねずみの図》

3. 特筆

彼の作品は画題が幅広く、卓越した筆致と機知に富んだ発想が見られる。市内の旧家に1879(明治12)年から1888(同21)年迄の作品(《地獄太夫と一休禅師図》《蛙の教練図》《達磨図》《高砂図》《乗合船図》《狸と座頭図》《羅漢と竜図》《須佐之男尊図》)が所蔵される。

〔参考資料〕『河鍋暁斎展 - 狭山と暁斎 - 』『河鍋暁斎画友 林宝仙のこと』『狭山市文化財年報』

『河鍋暁斎 逸話と生涯』『奇想の天才絵師河鍋暁斎』